

決勝原稿(朗読新人戦, 朗読) (森鷗外「山椒大夫」)

母親は余儀^{よぎ}ないことをするような心持ちで舟に乗った。子供らは^な凧いだ海の、青い^{かも}氈を敷いたような^{おもて}面を見て、物珍しさに胸をおどらせて乗った。ただ姥竹^{うばたけ}が顔には、きのう橋の下を立ち去ったときから、今舟に乗るときまで、不安の色が消え失せなかった。

山岡大夫は^{ともづな}纜を解いた。さおで岸を一押し押すと、舟は揺ゆらめきつつ浮び出た。

決勝原稿(アナウンス新人戦, アナウンス朗読)

京都府長岡京市では、毎年11月の第2日曜日に「長岡京ガラシャ祭」の行列巡行が行われます。

平成4年、長岡京市の歴史遺産の一つである勝竜寺城跡を整備したときに市民から提案があったもので、明智光秀の三女「玉」が細川家の勝竜寺城に輿入れした時の様子を再現したものなのだそうです。「ガラシャ」とは「玉」のクリスチャンネームです。

時代に翻弄され悲運の最期を遂げたと言われる細川ガラシャですが、このように市民に愛され続けています。